

巻 頭 言

藤原 耕二

京都大学大学院理学研究科数学専攻

この6年間、数学のアウトリーチ活動である「ジャーナリスト・イン・レジデンス (JIR)」というプログラムを運営してきました。その経験を中心に、科学と数学のアウトリーチ活動についての考えを書きます。

プログラムの概要ですが、イン・レジデンスとは滞在型という意味で、ジャーナリストの方が1-2週間、数学教室に滞在し、自由に取材する機会を提供するプログラムです。日本数学会を募集窓口として公募し、応募者の希望に応じて滞在機関を紹介してきました。いままでに、30人近くの方が参加しました。滞在中の活動は、数学者が他の研究機関を訪れたときのような生活、つまり、ちょっとしたオフィススペースをもらい、あとは自由に講演を聴いたり研究者と話したりという内容で、参加者の自主性が基本です。

滞在后、滞在者に何かを書いてもらうことを求めることはしません。ここが、このプログラムと記者発表の大きな違いです。科学の成果発表の手段として、研究機関や研究者による記者発表は、最近では一般的であり効果的な手段です。最新の成果を極力短く要約し、それを一気にメディア関係者に伝え、報道してもらう。それが記者発表です。記者発表が「点」の接点なら、JIRは「線」であり、また、JIRは伝えてももらいたい材料をこちらで用意はしません。科学研究において、「研究成果→記者発表→次の職と研究費→」というサイクルは、一部の分野では当たり前のようです。一方、このところの騒動も示すように行き過ぎには弊害もあり、JIRはそれに対する一つのオルタナティブだと考えます。

滞在型と並んで、プログラムのもう一つの特徴は、間接的なアウトリーチ活動であるということです。科学のアウトリーチ活動、ならびに研究成果の一般公開（論文の無料公開など）に対する社会からの要望は、今後ますます強まるでしょう。私自身も、公開講座や「出前授業」をしましたが、はたして、うまく出来たか自信はありません。研究成果の公開はともかく、アウトリーチ活動は、全員がやらなくてもいいのはいいか、というのが私の考えです。代わりに、ジャーナリストという専門家を通じて、数学界全体としてアウトリーチ活動をすることは、効果的な責任の果たし方の一つであると考えます。今は研究に専念したい、自分はアウトリーチ活動が苦手だという方にとっても、比較的参加しやすい形式かも知れません。

滞在者の受け入れ費用ですが、原則として、滞在機関に負担していただいています。これは最近の財政事情を考えれば容易ではないですし、滞在者の方々も、感謝と驚き

を口にします。そのときは、こう答えています。「数学の研究は人が第一であり、そのためには人材交流が必要。旅費はその基本であり、長期的な視野にたてばもっとも有効な投資である。これも、その一つです。」強がりといえばそうですが、本心でもあります。

数学教室は均質で静かな、閉じた世界であり、そこに JIR の滞在者が入ることは、受け入れ側にも参加者にも、ちょっとした非日常です。メリットですが、受け入れ側には風通しに加え、第三者の視点で数学や数学教室を見ることが出来る点、参加者にとっては、滞在を通して数学の知識が増えるだけでなく、研究・教育の場の「現場感覚」が体験できる点です。社会人に対して大学が開いている「窓」はいろいろありますが、最深部まで入り込める窓口という点で、JIR はユニークな存在です。

プログラムには、これまで二人の外国人（アメリカ人）ジャーナリストを受けいれました。サンプル数が少ないのですが、日本人の参加者の方と比べて、アプローチに差を感じました。研究者への聞き取りにおいて、お二人は研究内容を分からないながらも（数学ですから、科学ジャーナリストにとっても難解です）、長時間辛抱強く聞いてきます。結果として、記事にならないことも多いのではと思います。一方、日本の方々は、研究の「周辺」について丹念に取材します。始めは、「数学は難解で、内容そのものについてはなかなか報道してくれないものなのか」と考えたのですが、しばらくして、このスタイルは日本の報道においては、どの分野にも共通するものであると考えるようになりました。

たとえば、プロ野球を例にとります。日本シリーズを決する試合で松井選手が、さよならホームランを打ったとします。翌日の新聞は、高校時代の恩師のコメント・世話になっている整体師の話・よく立ち寄る居酒屋で昨日何を食べたか・その朝、家族とどんな会話をしたかというようなエピソードがあふれます。一方、アメリカの新聞は、よりデータや分析重視で、その試合での松井選手の全打席の配球・日本シリーズでの松井選手のホームランの記録・過去の日本シリーズにおける、さよならホームランの記録などが、紙面に載りそうです。

日本の報道は、人物にまつわるストーリーが重要な要素であり、時系列にそって新しいエピソードを追い求めます。ノーベル賞の受賞報道などでも、研究内容についての俯瞰的な解説は少なめです。誤解がないように言いますと、日本より欧米のジャーナリズムが優れているとは思っていません。どの国でも、すぐれたジャーナリストは、読者が知りたいことを書いているわけで、それは、鶏と卵の関係にあります。科学の報道について、内容そのものの比重がすこし増え、それを読んだ読者の方々が、もっと知りたいと思ってくれるなら、社会にとっても研究者にとってもメリットがあると思います。その方向に JIR が貢献できることを願っています。